

日本戦後文学の中の他者としての異文化、言語と女性像

—小島信夫作品を通じて—

田中アトキンス 緑*

1. はじめに

本稿は、戦後日本文学の中で表象される、日本国家という組織の‘中’から見た日本と、アメリカという異文化、他者という大枠を前提に、戦後から経済大国に向い、前進する日本を語った「第三の新人」作家グループの一人である小島信夫の作品をとりあげ、小島作品が、敗戦国日本の戦争の記憶、戦後の近代化に対峙するに当り、異文化、又は英語と言語、という他者を、どのように用いているのか、そして男性登場人物と対峙し、日本の他者と日本の間に位置するエージェンシーとしての女性の登場人物について考察したい。

小島信夫（1915-2006）は、1953年から1955年に文壇に出てきた一連の作家で、「第三の新人」と批評家の山本健吉が命名したグループのひとりである。第三の新人作家とは、大まかに、島尾敏雄（1917-2006）、近藤啓太郎（1920-2002）、安岡章太郎（1920-2013）、庄野潤三（1921-2009）、遠藤周作（1923-1996）、吉行淳之介（1924-1994）、三浦朱門（b.1926）、曾野綾子（b.1931）達を含む。大岡昇平（1909-1988）、野間宏（1915-1991）、椎名麟三（1911-1973）、梅崎春生（1915-1965）達に代表される「第一次戦後派」作家が、戦争体験、そこで対面した悲壮な実存主義を表現し、時にはマルキズム思想を押し出して語ったものに対し、一概には、「第三の新人」作家の作品には、私小説的な作品の中で、ドラマ性が低いとも言える、

日常の中の非日常性を表現する傾向があるとされている。

1915年生まれの小島は、50年にわたる小説家としてのキャリアの中で、主人公達に、現実と想像世界、白昼夢の間を往来させ、その間、自虐的なユーモア、サーカズをちりばめた短編、長編作品以外にも、エッセイ、アメリカ文学作品批評、翻訳作品なども多数発表した。彼は1941年、東京帝国大学卒業後、私立日本中学の英語教師として就職したが、同年、徴兵され、中国各地（大同、山東省、北京）にて暗号兵として配属される。情報部隊で半年従軍した後、終戦を迎え、31歳で日本へ復員後、明治大学で教鞭をとり、英語を教えながら作家活動を続け、1955年に、短編小説『アメリカン・スクール』で芥川賞を受賞、1957年には、ロックフェラー財団の招聘で一年間渡米する。¹ 小島は、一連のエッセイを除き、アメリカでの生活経験を前面に出したフィクションを書いたというのではなく、1961年の新居建築、転居、妻キヨの癌の手術、1963年のキヨの死、翌年再婚、という私生活でのイベントが、彼の多くの作品の中でモチーフとして再現される。小島の戦争小説には、片親が日本人である兵士達や、その中に混じる通訳の日本兵、又は、日系二世の日本軍兵士の主人公達をアジアでの戦闘地の前線、敗戦直後の中国に設定したものや、英語、異文化、アメリカを、日常生活に侵入してくるものとして捉えた家族小説作品などがある。他者とも言い切れない中間に存在するもの、又は異質なモチーフを紹介することで、異文化、他者、自己の本質を問

* ロンドン大学SOAS, JAPAN RESEARCH CENTRE

う、という意味で、他の「第三の新人」作家群の作品の中でも一味違ったものを含んだものがあると言えるだろう。

2. 国家と言語、異文化を語る戦争作品、『燕京大学部隊』と『星』

小島の1952年発表の短編戦争小説『燕京大学部隊』は、彼が1944年から敗戦まで、暗号兵として所属していた情報部隊が設置されていた燕京大学が舞台となっている。国家の伝統的な価値、美化された日本の精神を身につけている忠実な「出口少佐」や、冷めた批判的な目で軍隊、国家と戦争を受け止めている、出世に遅れをとった「蝗谷中佐」のもとに、日本人とインドネシア人を両親に持つ「小山」、青い眼で六尺もあり、アメリカ人の海兵隊員を父に持つ「阿比川」などの「二世兵」達、商売のことを常に考え、個人主義を押し出す日本人兵「埴」等が集った情報部隊の、敗戦直前の閉塞感、狂気や悲哀のこもった様子を、中国人の娼婦「とし子」も絡めながら、主人公「小島」が、冷静で客観的な目を保ちつつ語る。「毛色の変った兵隊たちは、怪しげな南方や、カリフォルニアの歌」を歌い、「日本語をろくにできん」と言われる彼らと、英語が十分にできないにもかかわらず、希望して部隊に配属された日本人兵達との会話には、死と常に対面する緊迫感を持つべき状況や、事件が起こるナラティブに、緩んだユーモアが組み合わされ、自虐感をもたらす。

この異質の者の集まりであるグループは、国家の中心とは距離を持った、独立した異空間であり、中心の司令官達からは情報部隊としての存在価値そのものも懷疑されている。又、部隊のいる燕京大学とは、1919年に英米の教会が関わり、その後もアメリカの企業、個人資金を持って、中国皇族の所持していた土地、建物に大学を設置したという大学創設の因果で、日清戦争中はアメリカの治外法権を持ち、大日本帝国軍の侵入を避けること

ができたという歴史を持った場所である。『燕京大学部隊』では、そこは、日中戦争、第二次世界大戦中、日本が侵入した中国の中、設立当時からアメリカとの関わりを持った大学の空間でもあり、そこに日本語と、英語、オランダ語とが飛びかうような日本の部隊が滞在する。文化的、政治的にも、混在した、ケオティックな空間と言える。内地、国家への所属意識もアイデンティティも様々で、シニカルな兵隊達は、「意味のわからない未知」のセミオティックとしての「暗号」を解くという意思希望も持たないばかりではなく、不真面目に解こうとし、更には洗濯器具の図面を暗号解明機だと上官に嘘をつく様な、場違いなユーモアも入り混じった、異質な空間である。

このような、異質の言語というモチーフが関わる、日本と異文化の中間という設定は、1954年発表の作品『星』でも繰り返される。『星』は、「アメリカ」と呼ばれ、日本人の殴られてばかりの弱者という設定の兵隊からも「お前さんはやっぱり日本人じゃないわ。」と言われる日系アメリカ人「杉原譲次」を主人公にしている。彼は、軍隊の中での自己存在、価値の起点、ひいては、国家所属意識の度合いとなるものが、そのランクを表す「星」の数による、と信じ始める。「杉原」は、「中学に行くようになってカリフォルニアの両親のもとに引きとられ、向こうで大学を終えたのち、叔父に会いに日本にもどってきたまま兵隊になった経歴」を持ち、戦中の日本国家に従属する状況に落ちいってしまったという設定で、国家に対する忠誠心、愛国心は「星」によって表象されている。「猪間大尉」付きの当番兵になってからは、「お前が日本軍人になるのは大変だぞ。今日かぎりお前の過去はないものと思え。」と言われ、毎日反省録を書かされ、日本軍人になりつつあるのかをチェックされる。彼は、「大尉」の三つの星に密かに「トム、フランク、ケイト」という名をつけ、「猪間大尉」の星と自分の星一つを軍服に取り替え縫い付ける、という迷想を実行し、その星に異

常な執着を持つ拳句、「猪間大尉」の軍服まで隠れて着てしまう。「自由主義の国に育った」と凶弾され、他者とされる「杉原」は、無意識に軍隊内でジャズを歌ってしまい、「猪間大尉」を殴り、狂人のように北京の街をさ迷い、自己喪失感に襲われてしまう。彼は終戦後も通訳となり、英語を教授し、復員船の中では、アメリカの軍曹や兵隊と日本復員との間をとるという、異文化の具象化であり、日本とアメリカの「間」空間に存在する立場にいる。そこでも、アメリカ軍兵、日本軍兵とも、軍服につけた星は、国家、存在と価値を写し替えるメタファーとされている。千人以上の日本人復員が蠢く、その船底では、アメリカ兵は日本兵の星をもぎ取り取ろうとし、最初は拒んでいた日本人兵達も、自ら星をもぎ捨てるという国を欺く行動に移る。「大事な星を自分で取るな、やめろ、」と、繰り返し叫ぶ「杉原」も、星をもぎ取られるが、やがて、星を失ったにもかかわらず笑う「猪間大尉」や兵隊達が、「あたらしい星を探そうとしているのだ」と、認識する。ここでは「星」を通して、国家への従属意識、帰属意識の転換が行われ、「杉原」のアイデンティティの確信は、もはや、いつの間にか米軍の軍服を着た自分が日本に帰ってきたことに気づいたところで、曖昧に終わる。

これら一連の作品、登場人物達は、ベネディクト・アンダーセンの言説が設定するところとする、言語を所属意識の中心にして形成された「想像の共同体」としての国家、そして戦前・戦後、旧・新の日本との帰属意識とは何かを問っている。日本にとっての異文化、又は異文化と日本の中間の空間に存在し、日本国家に所属した日本人として甘受されきれない彼らは、終戦を機に、どちらに向かっていくのか。2作品とも、明確な答は出さずであるが、一連の登場人物の国家に対する忠誠は、ゆるいものであったと、異文化を鏡として提示している。強者の異文化と言語、又は中間に存在する二世達をモチーフにしない小島の戦争小説

も、国家に対する忠誠は確固たるものではない。

3. 戦後日本における異文化とのエンカウンターと女性像：『アメリカン・スクール』と『抱擁家族』

1954年に発表された『アメリカン・スクール』と、10年後の作品『抱擁家族』は、戦後日本を舞台にし、アメリカの大きな影のもとに、煩悶、苦悩、危惧、杞憂する人間を描いている。両作品の登場人物は、精神の正常性、日常性を保とうと藻掻き、残忍で凶悪な戦中の出来事、敗戦という記憶の強い余韻の中で、反逆の衝動と向き合い、飲み込まれる。戦後日本が、国家として、アメリカによる占領のもとでの西洋へのエクスポージャーや、近代・アメリカ化、西洋文化を他者化することによって内観するというプロセスを辿ったように、小島作品の主人公達も、同様に、アメリカを断然、他者として理解し、自身を敗戦国家の国民とする自己感を振り切ることはできない。これらの作品で、彼ら、男性登場人物とは対象に、女性人物の異文化に対する他者観、同一性はどうか描かれているのかを、ここで考察してみたい。

3.1. 勝者としての英語

『アメリカン・スクール』は、1954年のサンフランシスコ条約が結ばれた年に発表された短編作品である。占領軍が徐々に日本から去って行った当時、小島は、この短編を、戦後3年後という設定にし、占領下の日本で、30人の日本人の英語教師たちが、米軍基地にあるアメリカンスクールを見学訪問するというイベントを、滑稽に、残酷に語っている。ここでも、先の2作品の様に、言語が「国家と所属」を代弁するものと設定されている。見学訪問に参加しなければならない一人の主人公は、英語教師だが、英語を話すことに強い違和感を覚え、話せないと確信し、それを隠すために、基地での見学訪問では、話すということを一切避け、拒否し、逃げ回るという陳腐な行動をす

る「伊佐」である。弱者、敗者という印象の「伊佐」だが、米兵と車に乗り合わせる状況に陥った時は、彼を殺してしまうかもしれない、という衝動を持つ、戦争のトラウマも持ち合わせている。「伊佐」と対照的な「山田」は、戦中、中国人やアメリカ人の首を切ったという経験もあるが、今ではアメリカ留学を望んでおり、英語を話せることを誇りとして、アメリカとは「同じ英語を使う国民同士の間柄」と言い、占領国と同等であろうと、積極的にアメリカに同化しようとしていることをアピールすると同時に、「敗戦国民」であっても、誇り高い日本人としての態度を見せる様、グループの中で強引にリードしようとする。ここに、この二人よりも英語も流暢に話し、アメリカ人兵とも、「伊佐」と「山田」の様な極端なごちなさを持たずに対面する紅一点の女教員「ミチ子」が加わる。彼女は、米軍兵との会話では「日本人と話をする時よりも生き生きとした表情に富み、女らしくさえ」なり、彼らを軽く受け流しつつも、チョコレートやチーズをもらい、それを周りの男性教師に分け与える。そのため、彼女の周りを日本人男性教師たちは離れない。

「伊佐」は、アメリカ人と英語を話す機会を避けるために、仮病を使って、学校を休む。基地では、日本語さえも話す機会を持たされないように、食べていると誰も話しかけてこないだろうという目算で、持参した弁当を朝から食べだす。さらに、靴擦れし、歩きづらくなった時、裸足で歩く様を米兵たちに見られないように、という計らいで、日本人英語教師達に囲まれて歩き、途中、道で用を足していたところを、ジープに乗れと親切的な米兵に誘われるにもかかわらず、道路脇の畑に転び降り、拒否する。こういった一連の、スラップスティック、ドタバタ喜劇的なシーンは、小島の得意とするテクニクであり、先の2作品同様、自虐的な笑いを含んでいる。それらは勝者のアメリカと英語、負者、日本と日本語というダイコトミーを様々な形で強調している。「伊佐」の、笑

いを誘う狂気的な行動の奥に潜む頑固な意志には、「日本人が外人みたいに英語を話すなんて、バカな。外人みたいに話せば外人になってしまう。そんな恥ずかしいことが。」「おれが別の人間になってしまう。おれはそれだけは嫌だ!」という確固たる自己意識があり、言語、異文化、強者としてのアメリカとは同化しないという頑固な決意が窺える。アメリカンスクールを見学中、豊かさや異文化を目の前にして、勝者アメリカに対し憤りを隠せない「山田」と同様、アメリカ人女教師の容姿を「食料や、物資や人種に恵まれ」「同じ人間とは思えない」と認識せざるをえない「伊佐」の行動や反応は、スラップスティック効果の故、悲しさ、惨めさ、葛藤、対抗、反抗と同時に、占領下に生きる日本人の厳しい現実、記憶と切迫感を浮きあげる。

戦争に参加してきた「山田」と「伊佐」は、英語を唯々諾々と話したい者と、全くそうではない者、つまり、両者共、バランスを欠いた、敗者のカリカチュアとしての役割を果たしている。反対に、戦争未亡人として、母親として、生活を背負い、食料、内職の調達など、生活の糧を得ていくことを必要とする「ミチ子」の場合は、「英語を話す時には何かもう自分ではなくなる。そして外国語で話した喜びと興奮が支配してしまう」という、政治的なイデオロギーと離れたところでの英語との関係を自覚しながら、アメリカに密着する。敗戦国日本を踏み台にして建設されたアメリカンスクールの設備や、基地に建てられた近代的で豊かな住居などを目の前にして、彼女は他の男性英語教師程の憤りは持たないが、アメリカ人女性の容姿に対しては、劣等感を感じずにいられない。彼女の苛立ちは、どこまでも異文化に擦り寄っていきながらも、軍事国家日本を表象する「山田」と、頑固にいじけすぎているにも拘らず、アメリカ人女性から可愛がられるような「伊佐」の方へと向いてゆく。このように、『アメリカン・スクール』では、男性登場人物が高圧的な政治的権力と

して英語と対峙するのに対し、女性である「ミチ子」は、寧ろ実存的なもの、エキサイティングで、感情が高ぶるものとして捉えている。

この作品に関する国内外の諸論文では、「ミチ子」が見学のために持参した、当時購入困難なハイヒールと、彼女が家に忘れてきた、弁当用の箸に注目し、アメリカと日本、という比喻対比を当てはめ、後退、または、停滞する男性に対し、前進する女性、という解釈が見られる。米兵と流暢に話をし、ハイヒールを履くことで心躍り、日本人の生活のメタファーとも言える箸を忘れてきた、という点に焦点を置き、戦後の日本で進んでいく、近代化する女性像を語っているというのが、大方の見解である。しかし、結局は、彼女も、箸をこっそり「伊佐」に借りる時、アメリカンスクール校内で、なれないハイヒールをはいて、箸を持ちながら、廊下で滑り、大声を出して転んでしまう、という屈辱的醜態を演じ、アメリカンスクールの、強い成熟した男性を具体化した「ウィリアム校長」に、日本見学者は、以後ハイヒールを履いてこないこと、校内での教育に口を出さないこと、と言い渡され、アメリカとの境界線を引かれてしまう。アメリカンスクールは、いわゆる、コロニアル内の特別空間であり、そこで、小島は、女性が、敗戦後の国家で、他者との自己意識においては、「山田」や「伊佐」とは違った場所にいることを表示しながらも、結局、冷静さや落ち着きを示唆するアメリカという権力の前で、そして、押し寄せてくる占領国アメリカの力の下で、自己の喪失を感知しながらも滑稽に屈し、断固として否定される切なさを描いている。ここでの女性の役割は、ケイト ミレットが指摘し、批判した様に、肉体とは、すなわち政治であり、歴史でもあるとして、男性をmind、頭、理性として設定することに対して、女性はbody、肉体、生殖の器、本能的であるということを二元的に限定した言説と照合するものと言えよう。

3.2. 『抱擁家族』：消費される肉体

最後に取り上げる作品『抱擁家族』は、小島作品のカテゴリーとしては、家族小説に属する。小島は、家族、夫婦間の葛藤、家族の死をテーマとして扱った作品を多く残しており、『抱擁家族』では、大学教師である「三輪俊介」の妻の「時子」が病気で死んでゆく過程と、新しく家を建設することなどで、夫婦関係を復旧しようと試み、「時子」の死後、家族の形を保とうと苦戦する「俊介」の様子を語っている。この作品が発表された1965年の日本は、先出の短編が発表された1955年頃の、米国占領軍の記憶が残る日本と比べ、1964年の東京オリンピックを通じて、戦後の回復、そして、さらなる近代化を世界に向けて見せる様、東京の都市空間が大きく変わった翌年である。この空間の変化に関しては、一つの例として、1962年、プリンストン大学で研究、教授した評論家の江藤淳が帰国した際に、その変化に驚愕し、その後、戦後の家族の崩壊、喪失といった言説を固めていき、日本回帰概念へと向かっていったと、『アメリカと私』（1965）で言及していることから察することができるであろう。

『アメリカン・スクール』で、勝者として、そして、近代的で、成熟した、親切な登場人物によってアメリカを表現した小島は、『抱擁家族』では、アメリカを破壊的な力、disruptive forceと設定している。「俊介」は、強く、行動力に長ける妻、「時子」との関係においては、お互いの愛情、憎悪のバランスが絶え間無くシフトするものとしてとらえ、怯え、怒り、喜び、甘える。不安定な夫婦関係の中、常に、過剰、又は、突飛な行動で反応し、家の主、権威のある父、夫という役割をうまく果たすことはできない。こう言った脆弱な関係には、「俊介」が単身でアメリカへ住みに行ったことに対する「時子」の不満、そして、家族付き合いをする米兵の「ジョージ」を家に呼び、彼と肉体関係を持った「時子」の言動にも理由がある。ここでは、『燕京大学部隊』、『星』、『アメリ

カン・スクール』のように、言語、英語が政治的な力としてモチーフに使われたり、全面に押し出されてはこないが、『アメリカン・スクール』で言及した、女性の異文化への実存的な歩み寄りや、アメリカの力が有無を言わず家に入ってくるという政治的なテーマが繰り返されている。

『抱擁家族』に関する既存の研究論文、エッセイは、「時子」のアメリカ人「ジョージ」との姦通をテーマにしたものが大半であるが、江藤淳は、この夫婦関係を、批評作品『成熟と喪失』の中で、農耕社会日本の母子密着という文化論を基盤にし、妻との関係において、男性は、母と密着した自己形成のつなぎで、「家」の中では、妻を母として見、主体性を持って他者としてみることはないものであり、従って、母、又は、母のような妻を失うまで、成熟することはない、と「俊介」と「時子」の関係を分析した。² 江藤淳の言説を考慮し、論を進めると、「家」の中で妻と同体化している夫は、敗戦によって、父的な国家を失い、母親さえも、近代化、つまり、この場合は、他者であるアメリカ化してゆく日本と同化するという脅威を感じる、という解釈ができるであろう。この脅威、違和感を具象化したものが、妻「時子」のアメリカ人との肉体関係であり、「時子」が固辞した「カリフォルニアにありそうな」家の建築であろう。

「ジョージ」に寄っていった時子は、アメリカである「ジョージ」に侵略され、侵略することで、壊される器になり、癌に侵され、死と対面することになる。ここで、「時子」はアメリカに侵略された肉体、政治的な「器」となる。「俊介」は、その侵略を食い止めるため、自分達夫婦と家族を守るべく、もう一つの「器」として、そして「時子」は異文化としての西洋を自己化する為に、強く近代的な、アメリカ風の家を作る。³ 「時子」は、自分達の想像・創造した近代、アメリカという「器」を完成後（関係を絶った後）、「ジョージ」に誇らしげに見せるために招待する。しかし、そのモダンな家も、壊れたり、不便になり、友達に

は家族が集まりにくい、ホテルのような空間と批判され、「俊介」には心休まる空間ではない。「時子」の死後は、そこへ、アメリカ帰りの日本人男性と一緒に住まわせたりするものの、何れ彼も去っていく。異文化、アメリカとの共存、アメリカを持ち込むことによって仮の家族を形成しようとしたところで、幸福とは結びつかず、家族の絆の回復、創造は不可能に終わり、小島はここで、アメリカを、あくまで他者として捉え続ける。

他者と日本を渡るエージェンシーとしての「時子」の肉体の扱い方を、『抱擁家族』発表から十年後、日本が更なる高度成長を続けた時期に発表されたポストモダン小説を、ジャンフランソワリオタードが提唱したHyper-Consumption、超消費、という意味から考慮してみると、少なくとも、ある女性作家作品では、肉体の消費の表象が、『抱擁家族』とは強く異なっていると言える。例えば、金井美恵子の『兎』（1972）に見られる少女、「小百合」は、父親と共有できる密な空間、時間を持つことを可能にするオブジェクトとしての兎を殺し、父と共に日々過食する。この、セレモニーとしての消費は異様に進展し、彼女は兎と同化することを望み、殺した兎を使って作った兎のコスチュームを着て見せ、挙句に父をショック死、殺してしまう。ここで金井は、肉体を通しての食、生（と性）のグロテスな過剰消費によって、少女から女性への変遷過程と自己認識のプロセスを語っている。一方、吉本ばななの短編『大川端綺譚』（1985）では、同じく、若い女性「私」が多くの男女と、その場限りの肉体関係を持つ。様々な形態で肉体、性の探求を続けることに取り憑かれたようになるというエピソードを含んでいる。これらの作品では、女性の肉体は、消費するもの、されるもの、と認知され、女性が、肉体によって時代のエクセスを表現し、自己を発見し、主張する。それに対して、小島の先出の女性人物達は、暴力的な近代としての異文化、アメリカとの接触により、自己の主張をすることはな

く、消費される肉体であると表現したように思われる。『アメリカン・スクール』の「ミチ子」の設定は、勝者アメリカに擦り寄る女性が、理性と力のシンボルとしてのアメリカに否定される、まだ、戦後の低迷する、同じように理性として存在する日本人男性とともに、未熟な場所にいる女性であった。その10年後に書かれた『抱擁家族』の「時子」は、「ジョージ」と肉体関係を持ち、アメリカ的な家を見て、そこに住むということで、更に私的なもの、実存的なものとして消費した。しかし、次には、病に侵された肉体を通じ、別の意味での消費がなされる。一方、「俊介」の自己発見は、彼女の手術後、いつも彼に対しては高圧的な「時子」と交わったという過程と順序によって、近代、または異文化であるアメリカの器的な「時子」を消化したというプロセスを持った、とも考えられる。

本稿は、今回のコンソーシアムのテーマである「異文化」というところから、戦後の異文化、他者の言語と国家、勝者としてのアメリカ、異文化と肉体の政治化、という繋がりて論を展開させた。小島信夫作品は、英語に翻訳されている作品が、『アメリカン・スクール』『抱擁家族』と少なく、研究対象としても取り上げられることも少ない。これらの戦争作品では、二世兵、暗号と国家というモチーフをさらに日本の他者と日本の間に位置するエージェンシーとして掘り下げることもできる。又、女性作家による異文化としての他者、言語の扱いなども、比較対象として面白いだろう。更に、第三の新人作家達についても、国外では遠藤周作、島尾敏雄等を除き、研究対象として取り上げられることが少ないことなどから、今後も日本戦後作家作品研究の対象としてなりうるのではないかというのが私観である。

テキスト

小島信夫：

「燕京大学部隊（全）」1952、『城壁/星 小島信夫戦争小説集』2015、講談社所収
 「星」1954、『城壁/星 小島信夫戦争小説集』2015、講談社所収
 「アメリカン・スクール」1954『アメリカン・スクール』2008、新潮社所収
 『抱擁家族』1965、講談社
 『城壁/星 小島信夫戦争小説集』2015、講談社
 金井美恵子「兎」1972、集英社
 吉本ばなな「大川端綺譚」1985、『とかげ』1996、新潮社所収

参考文献

江藤淳『成熟と喪失 母の崩壊』1993、講談社
 江藤淳『アメリカと私』1969、講談社
 村上春樹『若い読者のための短編案内』1997、文藝春秋
 Andersen, Benedict R. O'G, *Imagined Communities: the origin and spread of nationalism*, London and New York: Verso, 2006
 Lyotard, Jean-Francois, *Toward the Postmodern*, Amherst and New York: Humanity Books, 1998
 Millet, Kate, *Sexual Politics*, Urbane and Chicago : University of Illinois, 1969

註

- 1 「第三の新人」作家群で、ロックフェラー財団を通じて渡米したものは安岡章太郎など、何人かいるという事実も興味のあるところである。
- 2 江藤は、『成熟と喪失』の中で、日本の農耕社会に着目し、母性文化へと関連させ、個人の独立が無く、主体性が存立しないとする日本の男女・夫婦関係を『抱擁家族』と関係させ、論じた。江藤の批評分析と対照的に、村上春樹は、同じく「家」を建てることで、立て直そうと策期する同名の「俊介」と「時子」の夫婦関係を語った小島の短編、『馬』(1954)に関し、妻を母と見、個人として独立しない夫という見解を取らず、純粹に、夫婦が内在するお互いに対する感情を学び、関係を立て直していく希望の持てる作品として、『若い読者のための短編案内』で、批評した。ちなみに、『馬』は、『抱擁家族』のプロットの一部に重なるものである。江藤淳の『抱擁家族』の分析、評論には、『アメリカと私』に見られる1960年代初頭当時の彼のアメリカでの滞在経験から打ち出されたアメリカの個人主義や自己形成と、自身と日本との比較考察が

多々見られる。

- 3 小島は、短編小説『眼』(1962)でも同じテーマで、主人公と手術をする妻が、新居を建て、そこでホテルのような浴室を持つことで、生命と夫婦としてのユニットと関係を維持していこうとする様子を語り、メタファーとしての家のあり方を提示している。